



信楽焼は、古琵琶湖層からとれる良質な土により、焼いた後の歪みが少なく割れにくい。その強みを活かして、大きなモノを作ることが得意なため、現在は陶器風呂や手洗い鉢などの大型商品で成功を収めている。

また、昭和初期頃には火鉢、昭和30年代には植木鉢、次は傘立てと、時代ごとの需要に素早く順応し、姿を変えてきた。

試験場では新素材の研究開発を行

モノづくり

名神高速道路栗東ICから信楽方面へ5分。自然豊かなその場所に信楽窯業技術試験場はある。今回はそこで行われる取組について高畑場長にお話をうかがった。

試験場の活動の1つに、月に一度窯業者向けに開催している勉強会がある。商品を作るには「なぜその商品を作ったのかストーリーを説明し、共感してもらうことが必要」と話す高畑場長。そのため試験場では、信楽焼の歴史などを学ぶ機会を提供している。その他にも商品販売時の空間の見せ方や、接客方法について学んでいる。こうした活動を通して、ブランド力の向上や、販路開拓につなげていきたいという。

コトづくり

い、透ける陶器や文字が浮き出るコップなどの製品を生み出している他、技術相談や品質保証試験を行い、信楽焼のモノづくりを支えている。

3つの柱で人を豊かにしたい

ヒトづくりは自分づくり

試験場は窯業の後継者を育成する場所でもある。毎年研修生を受け入れ、1年という短期間でスキルを身に付ける。卒業後はほとんどの研修生が窯元に就職する。「実際に経験しないとわからないことがある。経験しているからこそ、その人の言葉に説得力が出る。だからひとつづくりは自分づくりなのだ。」と高畑場長は話す。研修生にはたくさん経験を積んで、卒業後は地域のリーダーとなってもらいたいとの思いで、育成には特に力を入れている。

今後の信楽について聞くと、窯業者の居住環境を整えること、夢を持つ人のための稽古場や作業場を増やすこと、窯業者が自分の仕事にプライドを持つことが必要なのではないかと話す。今後の卒業生の活躍に期待したい。

こんなところに信楽焼

皆さんは「信楽焼＝狸」と思っていないだろうか。実は、信楽焼の生産のうち狸の置物が占める割合は僅か3%で、生産の4割は建材である。例えば国会議事堂の屋根や県庁本館の階段に信楽焼が使われている。信楽焼は様々な形で私たちの生活に浸透しているのだ。

モノづくり
ヒトづくり
コトづくり

高畑 宏亮



Profile
滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験場長1967年生まれ。滋賀県甲賀市出身。1990年入庁より現在まで同施設に勤務。

信楽窯業技術試験場のココがオススメ



▽展示交流スペースには昭和初期の作品や人間国宝の作品が展示されている。信楽産の木材が使用されておりぬくもりを感じることができる。



▽旧信楽窯業試験場長室の壁を移設。信楽焼のタイルで作られており、ひとつひとつ職員の手で移された貴重な作品。



△2025年に滋賀県で開催される国スポ・障スポの炬火受皿は信楽窯業試験場がデザイン。各市町で開催される採火イベントで使用される。

